

本校舎 小学部

学部テーマ 「主体的に学びを深める授業づくり

～障がいのある児童における道德の時間の指導を通して～

1 テーマ設定の理由

小学部では、これまで聴覚や肢体不自由・病弱など障がいのある児童の主体的な学びを引き出す授業づくりについて模索してきた。本校舎小学部の児童は、聴覚障がいのある児童や生活体験の不足により言語獲得に困難を生じる児童が多く在籍している。児童の実態から、言語に対して正確な認識や理解がなされていないことが、本人の正しい学びや表現につながっていないのではないかという課題が見えてきた。

そこで、本研究では、児童の主体的な学びを引き出し、学びを深めることで、自分の考えをいきいきと表現できる力を高めることを目的として、聴覚障がいや生活体験の不足による言語獲得に困難を生じる児童における道德指導に関する研究を進めていくこととした。

2 研究方針

障がいのある児童における道德の時間の指導はどうあればよいかについての研修や授業研究を通して、主体的な学びを引き出す授業づくりについて検討する。また、グループ毎の授業研究を重ねながら、障がいのある児童が道德的価値を理解し、主体的に学び、深く考えたり、自分の言葉で表現したりするよりよい道德の指導の在り方を明らかにしていく。

(1) 1年次の研究概要

ア 研究内容

- ・道德の授業改善

イ 研究方法

- ・道德の授業実践と授業研究会
- ・道德に関することの学部研修会

(2) 2年次の研究概要

ア 研究内容

- ・道德の授業改善（1年次の取り組みを土台として取り組む）

イ 研究方法

- ・研究授業、授業改善検討会の実施、研修会への参加
- ・主体的な学びにつながる（語彙力を伸ばす）ための支援方法や手立ての意見交換、共通理解
- ・研修会への参加

3 令和2・3年度 研究経過・内容※4月と2月に全職員共通の内容を伝達する機会を設定

月	内 容
5月	研1 学部ごとの今年度の方向性について
6月	研2 今年度の研究計画確認（推進計画、年計確認）
7月	研3 実践交流 高学年

9月	研4 実践交流 中学年
10月	研5 幼小学部研修会 講師 石川 敬氏 「障害をもつ児童における道徳の時間の指導について」
11月	研6 実践交流 低学年
12月	研7 研究のまとめ
R3年1月	研8 1年次研究のまとめ
4月	研① 研究方法の提案、確認、今年度の推進計画について
5月	研② 児童実態の共有（児童実態確認シート）、授業実践略案についての提案
6月	研③ 授業実践交流（456年）、協議
7月	研④ 授業実践交流（1年）、協議
9月	研⑤ 全日本聾研究会（島根県大会）授業視聴
10月	研⑥ // 授業分科会参加
11月	研⑦ 東北聾研究会 授業視聴、研究協議参加、学部内への参加報告
12月	研⑧-1 幼小学部研修会 講師 菅原敬子氏 「子どもの育ちを考える」 ⑧-2 2年研究のまとめ、R4年度研究テーマについて
1月	研⑨ 2年研究のまとめ

4 研究実践

(1) 1年次

ア 授業研究会の実施

56年道徳 □資料「折れたタワー（広い心）」

34年道徳 □資料「同じ小学校でも（国際理解）」「お母さんのいっしょ（個性の伸長）」

12年道徳 □資料「はしの上のおおかみ（感謝、思いやり）」

イ 学部研修会の実施

「障害をもつ児童における道徳の時間の指導について」

講師：石川 敬先生（前盛岡聴覚支援学校校長）

ウ 成果と課題

(ア) 成果

- ・道徳授業における児童の実態と課題を共通理解できた。
- ・各発達段階を通して、視覚的支援や体験的活動が重要であることを確認できた。
- ・児童の実態に合わせ、内容をかみ砕いて提示することやロールプレイを行うことにより、児童がより資料に引き込まれ、主体的な学びにつながった。

(イ) 課題

- ・語彙的理解、体験不足な面から、内容理解が難しいため、資料の提示方法や支援に工夫が必要である。
- ・複式編成での授業、児童の実態に合わせた授業のために、年間の指導内容をどのように選択するか精選が必要である。

(2) 2年次

ア 道徳の授業における児童の実態把握（学習シート【図1】を用いての実態把握）

(ア) 単元名・内容

学びの集団、児童の実態に合う教材か、内容の精選

(イ) 主体的な学びにつながる支援・手立て

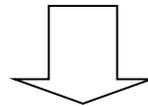
研究テーマに沿った効果的な授業づくり
 (ウ) 成果と課題
 効果的な学習支援と児童の実態把握の共有

【図1】

学習シート		
学級	単元名・内容	学級開きをしよう (学級目標・係決め)
4・5B	単元名・内容	【4, 5年】 みんなで協力しあって楽しい学級や学校をつくること
		【5年】 自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めること
	成果・課題	・児童が興味を持って取り組めるようなイラストや活動を提示 ・選択肢の提示 ・児童自身の言葉を引き出す工夫 (なぜ?どこ?なに?おしえて?)
1・2B	単元名・内容	たのしいがっこう 【1, 2年】 学級目標を考え、友達に自分の考えを伝える。
1・2B	単元名・内容	・学級目標とは何かを伝える。 ・子ども達が頑張りたいことを質問し、学級目標は何が良いか考えることができるようにする。 ・二つの選択肢を提示し、言葉の意味を伝える。 ・「どうして?」自分の考えの理由を考える質問をする。 ・友達の考えを聞くように促す。
		成果・課題

道徳の授業における児童の実態把握(ア)～(ウ)を柱に協議し、児童の実態把握を行うと共に、2年次の研究実践取り組み重点を、以下のように確認した。

- ・語彙力を広げ、内容理解につなげる手立てを組む。
- ・児童が表現することの楽しさに気付く工夫をする。
- ・複式学級や児童実態に合わせた教材を精選する。



主体的な学び

イ 授業実践交流

(ア) 各学級の授業提案 (指導略案作成【図2】、ビデオ撮影)

- ・指導略案作成の観点：取り組み重点を意識した手立てを組み、授業を行う。

授業提案1 456年道徳 「ほんとうのことだけど・・・」

目標

- ・学校行事と関連づけて教材を読み、内容を理解することができる。
- ・「自由」について考え、自分の考えを発表することができる。

主体的な学びにつながる手立て

- ・自分が体験した事柄と関連づけした教材を選ぶ。
- ・言葉が出てこない時には、選択肢を提示したり例文を伝えたりして、支援する。
- ・体験したことを想起し、内容理解を図るため、体験したことの写真を提示する。
- ・気持ちの表現が出てこないときには、気持ちを絵や色で表すよう支援する。

授業提案2 1年道徳 「たのしい がっこう」

目標

- ・良いことや嫌なことも含めて、自分の気持ちを素直に伝えることができる。
- ・学校生活を振り返り、7月の行事を知り、学校生活を楽しみにすることができる。

主体的な学びにつながる手立て

- ・イラストや写真を提示し、行事の名前や出来事を想起しやすいよう支援し、発問につなげる。
- ・小学部児童や教員の写真カードを用いて、音声と手話ネームで表現するよう促す。
- ・児童の発言を復唱し、正しい手話や音声言語の習得へつなげる。
- ・楽しんで学習や発言を行えるように、間違っても大丈夫だという雰囲気づくりをする。

【図2】

「道徳」学習指導略案

児童の実態		
名前	平均聴力レベル	実態
W・H	裸耳 右：72 dB 左：67 dB 補聴器装着 右：33 dB 左：34 dB	【コミュニケーション】 ・音声と簡単な手話を用いてコミュニケーションをとる。音声をよく聞いている。 ・分かっていることでも「何?」「何これ!？」と質問して、教師とやり取りを楽しんでいる。 ・やり取りする中で、わざと嘘をついて反応を楽しんだりする様子がある。 ・周りの反応をよく見ているので、相手が期待する答えを話すことがある。

目標

- ・良いこと嫌なことも含めて、自分の気持ちを素直に伝えることができる。
- ・学校生活を振り返り、7月の行事を知り、学校生活を楽しくすることができる。

令和3年6月24日(木)			
	学習活動・内容	指導上の留意点 (☆主体的な学びにつながる手立て)	教材・教具
導入	1 あいさつ	・話すときは児童が注目するように促す。	
	2 学習課題の提示 「たのしいがっこう」	・道徳の学習で行うことを「1つめ～、2つめ～」と伝える。	
	3 今までの生活や行事を振り返る	・イラストや写真を提示し、行事の名前や、どんなことがあったかを質問し、確認する。(☆) ・行事のイラストや写真を提示し、どんな気持ちだったかを質問する。(☆)	・イラスト ・写真
展開	4 7月の行事を知る	・写真を見ながら、ブール学習のイメージをもったり、思い出したりできるようにする。 ・期待感をもてるように、絵本の読み聞かせをする。	・絵本「たなばたブールびらき」
	5 ゲーム ・小学部の友達と先生の名前を確認する。	・写真カードを見て、音声と手話ネームで表現するように促す。 ・間違っても大丈夫だという雰囲気を作り、楽しんで覚えられるようにする。	
まとめ	6 まとめ		
	7 あいさつ		

(イ) 授業改善検討会

- ・授業の様子を視聴し、指導略案を基にしながら検討会を行った。
- ・授業改善のための方策、手立ての意見交換をし、授業づくりに活かした。

(ウ) 研修会への参加

a 全日聾研（島根県立松江ろう学校 授業視聴・分科会参加）

研究テーマ「思考力・判断力・表現力を育てるための授業づくり」

小学部第2学年 国語科 声やうごきであらわそう「名前を見てちょうだい」

- ・思考を促すための手立てについて【思考ツールの活用】

- ・上記指定授業についてのご助言 東京学芸大学 澤 隆史氏

b 東北聾研（岩手県立盛岡聴覚支援学校 授業視聴・分科会・授業実践交流参加）

研究テーマ「思考、表現する力を高めるための授業実践」

小学部1・2年 自立活動「日記を発表しよう！よく聞いてカードを探そう！」

- ・授業内容についてのご助言 広島大学大学院准教授 林田 真志氏

- ・聴覚障害の児童における日記指導の意義について

- ・「話す力」、「聞く力」を伸ばす授業実践交流

- ・思いや考えを視覚化、共有化して児童の思考を支援するツールや手立ての授業実践交流

C 幼小部研修会

「子どもの育ちを支える」

講師：奥州市子育て支援センター 所長 菅原敬子氏

- ・乳幼児期、学童期における感覚統合の重要性について

- ・各教育機関や支援センターとの連携について

- ・教育の大切さ（レジリエンスを育てること）について

5 成果と課題

(1) 成果（以下、取り組み重点に即した成果を記す）

- a 語彙力を広げ、内容理解につなげる手立てを組む。
- b 児童が表現することの楽しさに気づく工夫をする。
- C 複式学級や児童実態に合わせた教材を精選する。

- ・視覚的支援を意識して手立てを組むことで、教材の内容理解につながった。(a)
- ・教科書教材と実体験（行事等）を関連づけて指導計画をすることで、自分に置き換えて道徳的価値にせまることができた。(a、c)
- ・複式学級での授業実践に困難さはあるが、他者との意見交流があり、自分自身の考えの深まりにつながった。(a、b、c)
- ・選択肢や表現方法を提示することで、語彙数が少ないために表現がうまくできない児童でも、意欲的な学習活動を行うことができた。(a、b)
- ・児童が発表したことを否定せず受け止めたり、称賛したりすることで授業や集会時で自信をもち、発表することができるようになった。(b)
- ・習得した手話や言葉を掲示し、視覚的支援を行うことで日常の場面でも活用する様子が見られた。(a、b)
- ・一問一答で終わらず、復唱したり、理由を聞いたりすることで、語彙の習得や表現につながった。(a)
- ・道徳科の評価にあたっては、「他の児童との比較による評価ではなく、児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め励ます個人内評価として行う」こと【図3】の共通理解をし、評価を行った。

【図3 「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）（概要）】

平成28年7月22日

道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門会議 より抜粋

＜道徳科における評価の在り方＞

【道徳科における評価の基本的な考え方】

- 児童生徒の側から見れば、自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくものであり、教師の側から見れば、教師が目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料。
- 道徳科の特質を踏まえれば、評価に当たって、
 - ・ 数値による評価ではなく、記述式とすること、
 - ・ 個々の内容項目ごとではなく、太くくりなまとまりを踏まえた評価とすること、
 - ・ 他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価(※)として行うこと、
 - ・ 学習活動において児童生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること、
 - ・ 道徳科の学習活動における児童生徒の具体的な取組状況を一定のまとまりの中で見取ることが求められる。

※個人内評価・・・児童生徒のよい点を褒めたり、さらなる改善が望まれる点を指摘したりするなど、児童生徒の発達段階に応じ励ましていく評価

(2) 課題

- ・複式学級における児童の実態差や、教育課程の編成を踏まえての道徳の授業の在り方には、検討が必要である。
- ・広がりや深まりをもたせた語彙力の習得にも力を入れる必要がある。

6 まとめ

本研究は、2年の複数年にわたって行ったものであり、昨年度の研究主題を引き継ぎ、授業づくりを行ってきた。本校の道徳教育の重点目標である「経験の拡充を図り、豊かな道徳心情を育て、広い視野に立って道徳的判断や行動ができるように教育活動全体を通して道徳性を養う」とあるように、道徳の授業のみならず多様な場面で手立てを講じてきた。特に、昨年度の課題である「語彙力や体験数の不足」を改善すべく、主体的な学びへとつながる手立てを有効的に取り入れた授業を組むことで、児童の確かな変容につながった。

本学部在籍児童には、主体的な学びへとつながる手立てとして、語彙の獲得が重要であることが明確になった。次年度も、道徳の授業のみならず教育活動全般を通して、既習事項や経験と関連づけて自分に置き換えて物事を考えたり、学習活動を通して感じたことを自分の言葉で発表したりすることを習慣づけていくことを継続して取り組みたい。